住友ファーマ株式会社

2024年度第3四半期決算説明会

2025年1月31日

イベント概要

[企業名] 住友ファーマ株式会社

[**企業 ID**] 4506

[**イベント言語**] JPN

[イベント種類] 決算説明会

[イベント名] 2024 年度第3四半期決算説明会

[決算期] 2025 年度 第 3 四半期

[日程] 2025年1月31日

「時間 16:30 – 17:20

(合計:50分、登壇:24分、質疑応答:26分)

[開催場所] インターネット配信

[**登壇者**] 6 名

代表取締役社長 木村 徹 (以下、木村)

代表取締役 副社長執行役員 酒井 基行(以下、酒井基行)

取締役 執行役員 中川 勉 (以下、中川)

常務執行役員 佐藤 由美(以下、佐藤)

執行役員 わけみ 裕(以下、わけみ)

経理部長 石田 幸嗣(以下、石田)

「アナリスト名」 JP モルガン証券 若尾 正示

モルガン・スタンレーMUFG 証券 村岡 真一郎

ジェフリーズ証券 スティーブン・バーカー

大和証券 橋口 和明

シティグループ証券 山口 秀丸

UBS 証券 酒井 文義

登壇

石田:お時間となりましたので、アナリスト、投資家の皆様を対象とした住友ファーマ 2024 年度 第 3 四半期決算説明会を始めさせていただきます。

本日はご多用の中ご参加いただき誠にありがとうございます。本説明会は、東京本社より Zoom ウェビナーによるライブ配信で進めてまいりたいと存じます。

弊社 Web サイトに掲載しております決算説明会資料に沿ってご説明したあとに、質疑応答の時間を設けておりますので、よろしくお願いいたします。

本日の出席者をご紹介します。代表取締役社長の木村、代表取締役副社長執行役員の酒井、取締役執行役員の中川、常務執行役員の佐藤、執行役員のわけみ、司会を務めます、経理部長の石田でございます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは木村より、2024年度第3四半期業績および臨床開発の現況についてご説明させていただきます。木村さん、よろしくお願いいたします。

■アジェンダ

- 2024年度3Q決算概要
- 2024年度業績予想
- 研究開発
- 質疑応答

Sumitomo Pharma

© Sumitomo Pharma Co., Ltd. All Rights Reserved. 2

木村:代表取締役社長の木村でございます。本日はご参集いただきましてありがとうございます。 既に資料は公開しておりますが、資料にのっとって今期の決算の説明をさせていただきます。

アジェンダは、今お示ししましたが、第3クォーターの決算概要、24年度の業績予想、そのあと研究開発というご説明をさせていただいたあと、質疑応答の時間を持ちたいと考えてございます。

2024年度3Q決算概要

■2024年度3Q決算 ハイライト

増収に加え、コスト削減の取組が奏功し、コア営業損益が黒字化

- 売上収益
 - 前年同期比24.7%増:米国でのオルゴビクス・ジェムテサの売上拡大等が貢献
- コスト
 - 販 管 費:前年同期比29.6%減:北米グループ会社の再編効果や日本でのコスト削減等

により減少

● 研究開発費:前年同期比48.0%減:パイプラインの選択と集中により減少

円安の影響もあり、最終利益でも黒字化

- 借入金の状況
 - ブリッジローンの返済期限:2025年3月末へ延長済み
 - 必要なリファイナンスについて、金融機関および住友化学と継続協議中

Sumitomo Pharma

© Sumitomo Pharma Co., Ltd. All Rights Reserved.

まずは、第3四半期の決算の概要をここにお示ししてございます。

増収に加えまして、コスト削減の取り組みが奏功しておりまして、コア営業損益が黒字化できたというのが、今回の一つの大きなトピックスになってございます。

売上収益は前年同期比の 24.7%増、コストにつきましては販管費、研究開発費とも大幅な削減をしてきておるということでございます。その結果としまして、あと円安もございますので、最終利益でも黒字化が図れたとのご報告をさせていただきます。

あと、詳しい説明は今回いたしませんが、皆さん、気にされておられています借入金の状況につきましては、ブリッジローンの返済期限は25年3月末へすでに延長してございます。また必要なリファイナンスについては、金融機関および親会社の住友化学と継続して協議を続けておるというところでございます。

	4年度3Q決		4 甘田 名	経営成績	(77	ベーフ)					想を修正しています 1参照)	
202	++ / × / 	THOU	77/1	江 山 //从侧	()	` ^	,		金	額単位:億円			
			2023年度	2024年度	2024年度			2024年度			■ 基幹3製品の伸長等に。		
				3Q実績	3Q実績	金額	うち 為替影響	%	5/14予想	進捗率%		り、売上収益が増加	
売	上	収	益	2,350	2,932	582	129	24.7	3,380	86.7	-	事業構造改善効果の発現	
売	上	原	価	932	1,135	203	37	21.8	1,380	82.3		に加え、研究開発投資の 選択と集中による削減等	
売	上 総	利	益	1,418	1,797	378	93	26.7	2,000	89.8		のグループをあげた合理	
販 売	費及び一	一般管	理 費	1,766	1,244	△522	56	△29.6	1,690	73.6		化により、販売費及び一	
研	究 開	発	費	680	354	∆326	9	△48.0	500	70.7		般管理費ならびに研究開 発費が大きく減少	
その化	也の収益・費	前用 (コア	7内)	64	16	∆47	_		200			光貝が八合く/成グ	
_	ア 営	業 利	益	∆964	215	1,179	28	_	10	_		コア営業損益が大幅に改	
非 経	常項目	(△ :	損)	∆214	△83	131			△10			善し、黒字化	
営	業	利	益	△1,177	132	1,310		_	0	_		非経常項目の主な内訳	
金 丽	融 収 益	・費	用	126	108	∆18			△180			(当期)	
税引	前四半期	(当期)	利益	△1,052	240	1,292			△180			日本および北米の事業構	
法	人 所	得	税	125	28	∆97			△20			造改善費用 (前期)	
四半	期(当	期)和	利 益	△1,177	212	1,389			△160	_		北米事業構造改善費用	
親会帰属	き 社 の i する四半期	所 有 者 相(当期)		△1,177	212	1,389		_	△160	_			
◆ Sun	mitomo Pharm	na		【平均レート】 2023年度3Q実績 2024年度3Q実績 2024年度予想:		1元=21.17円	2024		\$ =151.33円 \$ =158.15円			© Sumitomo Pharma Co., Ltd. All Rights Reserved.	

次に、第3四半期のコアベースの数字をここにお示ししてございます。

売上収益が 2,932 億円、昨年度比で 582 億円のアップになってございます。一番右を見ていただきますと、5 月 14 日予想と書いてございますが、これはわれわれの予算でございまして、3 四半期終わったところで 86.7%の進捗と見ていただければと思います。

売上総利益が 1,797 億円、378 億円の増になってございます。申し上げたように販管費および研究開発費につきましては、522 億あるいは 326 億円の削減ができておりまして、コア営業利益としましては 215 億円を計上いたしました。その次、非経常項目でございますが、これは日本で事業構造改革をいたしました費用、および北米の前期の事業構造改革費用が出てきておるところでございます。

その結果、営業利益が132億円。金融収益・費用につきましては、若干円安が進んでございますので、108億円になってございます。

その結果、親会社の所有者に帰属する四半期の利益が 212 億円で、昨年度と比べて 1,389 億円の 改善になってございます。

この結果をもちまして、当期の業績予想を修正したいと考えておりますので、それは後ほどご説明 させていただきます。

	2023年度	2024年度	前年	2023年度	2024年度		増減			2024年度	Ę	■ 基幹3製品合計では記 画を上回る伸長 <3Q計画比> (百万ドル)			
	3Q実績	3Q実績	同期比	3Q実績	3Q実績	金額	うち 為替影響	%	5/14	予想	円ベース 進捗率%				
北米		百万ドル				億円			百万ドル	百万ドル 億円		計画	実績	%	
オルゴビクス	215	379	163	309	578	269	35	87.2	400	579	99.8	293	379	129.3	
マイフェンブリー	49	66	16	71	101	30	6	41.8	124	179	56.2	89	66	74.2	
ジェムテサ	174	283	109	249	432	183	26	73.2	380	550	78.5	238	283	118.8	
アプティオム	175	200	24	252	305	53	19	21.1	201	291	104.7				
リサイミック	30	33	3	43	51	8	3	18.2	49	72	70.7	ププティオムは価 要因により増収			
その他	47	43	△4	68	65	△2	4	△3.4	216	316	103.7	自社単独による事		ブリーの	
輸出、一時金収入等※	114	172	58	163	262	100	16	61.2		310	103.7			る事業	
合計	805	1,175	370	1,154	1,794	640	109	55.5	1,370	1,987	90.3	・ 化への移行に伴う 延収益の一括計上			
※ 主な一時金収入等															
2022年度	-社との提携	に関する繰る	E収益	\$88M	2024年度 3Q実績	ファイザー	-社との提	携に関す	る繰延収益	<u></u>	\$147M	【平均レート 2023年度3Q		143.33円	

ここでは主要製品の売上収益ということで、北米の収益をお示ししてございます。

北米 3 製品、オルゴビクス、マイフェンブリー、ジャムテサにつきましては、オルゴビクスが 578 億円、マイフェンブリーが 101 億円、ジェムテサが 432 億円で、昨年度比それぞれ大幅なアップ になってございます。

一方で、期初の予算と比べますと、一番右を見ていただくと、ドルベースにはなりますが、オルゴビクス 129%、ジェムテサが 119%、一方でマイフェンブリーは 74%になってございます。3 点合わせて、予算比で 17%アップになってございます。

その他、アプティオム、リサイミック、示してございますが、合計 1,794 億円で、昨年度比 640 億円アップ。われわれの予算と比べましても、現在の進捗率が 90.3%で、好調な進捗を示してございます。

ここで一つ加えますと、マイフェンブリーにつきまして、ファイザーさんとの共同で販売しておりましたが、両者協議の上、昨年の12月いっぱいをもちまして、当社の自社単独販売という形に切

り替えてございます。それにより、繰延収益の一括計上 91 億ございますが、一番下、輸出、一時 金収入 262 億円の中には、それも含まれておるということでございます。

主要製品売上収	ш (П4	, , , ,	,		氢	·額単位:億円	
	2023年度	2024年度	増	咸	2024年度		
	3Q実績	3Q実績	金額	%	5/14予想	進捗率%	
日本			,	,			日本
エクア・エクメット	246	209	∆37	△14.9	263	79.6	
ラツーダ	90	102	12	13.7	130	78.7	■ ラツーダ、ツイミーグ、AG品
ツイミーグ	35	57	22	62.7	113	50.3	は引き続き伸長
メトグルコ	57	57	△0	△0.0	74	76.7	
ロナセンテープ	29	36	6	21.8	44	81.3	
トレリーフ	131	32	△99	△75.9	21	150.4	■ トレリーフは独占販売期間終っ
AG品	71	88	17	24.1	111	79.0	により減少
その他	182	151	∆31	△17.2	247	82.8	■ セグメント全体の薬価改定影
輸出、一時金収入等	51	54	3	6.0	241	02.0	△41億円
合計	892	785	△107	△12.0	1,003	78.2	
アジア			-				アジア
メロペン(中国)	153	197	44	28.9	212	93.1	■ メロペン(中国)は増収
その他	152	156	4	2.8	178	87.6	
合計	305	353	48	15.9	390	90.6	

日本・アジアの製品別の売上を示してございます。

日本は、エクア・エクメット、特にエクアにつきまして、12月にLOEということで、若干落ちてきてございます。その他、ツイミーグにつきましては、当初予算に比べて若干遅れてございますが、ラツーダ、メトグルコ、その他は順調に進んでおるということでございます。

一方で、トレリーフが 6 月に独占期間が終了してございますので、大幅な減少になってございます。それを反映して日本の売上という意味では、昨年度比 107 億減の 785 億円になってございますが、当初の予算と比べては、まだ強含みで推移しておるということでございます。

続きましてアジア、中国でございますが、中国のメロペンは引き続き好調でございまして、合計 353 億円で、昨年度比 48 億円のアップと、われわれの予算比でも好調に推移しておるところでご ざいます。

2024年度3Q決算概要 ■セグメント別 経営成績(コアベース) 金額単位:億円 アジア 売上収益 785 1.794 353 2,932 売上原価 403 649 83 1,135 3 0 売上総利益 382 1,144 270 1,797 Q 2 販売費及び一般管理費 289 862 94 1,244 実 4 コアセグメント利益 176 93 283 552 績 年 研究開発費 354 度 コア営業利益 215 売上収益 892 1,154 305 2,350 売上原価 421 434 77 932 3 0 売上総利益 470 720 228 1,418 Q 2 販売費及び一般管理費 357 1,321 88 1,766 実 3 る コアセグメント利益 140 113 △601 △348 研究開発費 680 度 コア営業利益 △964 売上収益 △107 640 48 582 僧 販売費及び一般管理費 6 △69 △459 △522 減

△20

884

日本セグメント

■ コスト削減により販売費及び一般管理費は減少し たものの、減収による売上総利益の減少の影響が 大きく、コアセグメント利益は減少

北米セグメント

■ 増収による売上総利益の増加に加え、販売費及び 一般管理費の削減により、コアセグメント利益は 大きく増加

アジアセグメント

増収による売上総利益の増加により、コアセグメ ント利益は増加

© Sumitomo Pharma Co., Ltd. All Rights Reserved.

ここにセグメント別の営業成績をお示してございます。

コアセグメント利益

研究開発費

コア営業利益

日本・北米・アジアそれぞれにおいて、コアセグメント利益が黒字化を達成しておりまして、合計 で 552 億円の黒字になってございます。研究開発費引いたあとのコア営業利益でも、215 億円の黒 字になっております。

36

900

△326

1,179

昨年度との増減を一番下にお示ししておりますが、日本では、先ほどのトレリーフの LOE が影響 しておりまして、コアセグメント利益でも 20 億円の減になっておりますが、北米は好調で、昨年 度比のコアセグメント利益レベルで884億円のアップということでございます。

2024年度業績予想

■2024年度業績予想修正のハイライト

基幹3製品の売上拡大およびコストマネジメントの効果発現により、 コア営業利益を300億円に上方修正

- 売上収益
 - 米国でのオルゴビクスの売上が当初想定を上回ることに加え、マイフェンブリーに関する繰延収益の一括計上の影響等により、北米セグメントを中心に上方修正
- コスト
 - 販 管 費:主に日本における事業構造改革等による費用削減により減少
 - 研究開発費:選択と集中により削減した予算が維持されている
 - また、住友化学との再生・細胞医薬事業の一体運営(非連結化)により減少
- その他の収益・費用
 - 連結子会社であったS-RACMO社持分の一部譲渡、当社再生・細胞医薬分野の医薬品事業の譲渡を 含む120億円(期初予想は200億円)

◆ Sumitomo Pharma

◆ Sumitomo Pharma

◆ Sumitomo Pharma

こういう結果をもちまして、業績予想を変更させていただきたいと考えております。

基幹3製品の売上拡大およびコストマネジメントの効果が発現してございますので、コア営業利益300億円ということで上方修正させていただきます。

今ご説明いたしました通り、米国でオルゴビクスを中心に売上好調。一方でマイフェンブリーの繰延収益の一括計上もございましたので、北米での上方修正の大きな根拠となってございます。

一方でコストは、日本での事業構造改革によりまして、費用削減により減少しております。また研究開発費も選択と集中を進めており、予算の抑制が継続しております一方で、再生・細胞医薬事業の住友化学との一体運営ということで、2月以降は非連結化というところで、そこも減ってまいるということがございます。

その他費用につきましては、今後、再生・細胞医薬事業の医薬品譲渡を住友化学、RACTHERA を設立することで譲渡いたしますので、それについて 120 億円の譲渡益を想定しております。一方で S-RACMO につきましては、持分を住友化学に譲渡いたしまして、それについてはすでに第3四半期の決算の中で 16 億円を計上しておるところでございます

2024	4年度業	綾漬予 想	見(コ	アベース)	金	額単位:億円	
				2024年度	2024年度	従来引	予想比	【為替レート】
				5/14予想	修正予想	増減額	為替影響	2024年度従来予想: 1\$ =145.00円 1元=20.00円 修正予想: 1\$ =152.00円 1元=21.00円
売	上	収	益	3,380	3,810	430	130	
売	上	原	価	1,380	1,475	95	50	■ 売上収益:430億円の上方修正 (うち為替影響+130億円)
売	上 絲	3 利	益	2,000	2,335	335	80	為替影響を除く修正額
販 売	き費及び	一般管	理 費	1,690	1,670	△20	60	日本(△5億円): ツイミーグ下方修正の影響 北米(+259億円): オルゴビクス等が好調
研	究	発	費	500	485	△15	11	アジア(+46億円):メロペン(中国)が好調
その	他の収益・	費用(コフ	ア内)	200	120	△80		■ 販管費: 為替影響 + 60億円
_	ア営	業 利	益	10	300	290	9	日本で費用の減少を見込む
非 紹	至常 項 目	(🛆 :	損)	△10	∆90	△80		■ 研究開発費:為替影響+11億円
営	業	利	益	0	210	210		■ 研究開発質・局質影響+11億円
金	高虫	損	益	△180	△120	60		■ その他収益・費用(コア内) : S-RACMO社出資
法	人 月	行 得	税	△20	△70	△50		比率変更、再生・細胞医薬事業の譲渡による益
当	期	利	益	△160	160	320		■ 非経常項目: 国内における早期退職募集に伴う事
親会社	土の所有者に	帰属する当	期利益	△160	160	320		業構造改善費用を計上
	RC	E		△10.8%	9.8%			
	R O	I C		0.6%	7.1%			

その結果、24年度の業績予想の修正業績予想をここにお示ししてございます。一番左は予算、5月14日の予想の数字で、真ん中が修正予想となっております。

売上収益で 3,810 億円、売上総利益で 2,335 億円、販管費および研究開発費、それぞれ 1,670 億円 485 億円で、コア営業利益は 300 億円を想定してございます。

一方、非経常項目につきましては、先ほどご説明したような事業構造改革費用が乗っておるということで、営業利益で 210 億円と、われわれとして久しぶりの営業利益の黒字が今期は達成できると予想しております。

その他、金融損益は、為替の見直しをしたことで若干の変化があるということでございます。

最終的な親会社の所有者に帰属する当期利益では、160億円を予想してございます。

2024年度業績予想 ■主要製品売上収益(北米) 2024年度 2024年度 2024年度 2024年度 従来予想比 増減額 5/14予想 修正予想 5/14予想 修正予想 為替影響 増減額 % 北米セグメント 百万ドル 億円 オルゴビクス 400 516 116 579 785 206 36 35.6 ■ オルゴビクス、ジェム テサを上方修正 マイフェンブリー 80 122 124 △44 179 △57 6 ∆31.8 マイフェンブリーは下 方修正 ジェムテサ 380 413 33 550 628 78 29 14.2 ■ アプティオム上方修正 アプティオム 201 241 40 366 75 17 25.8 291 リサイミック 49 50 1 72 76 4 4 5.6 その他 一時金収入は繰延収益 377 17 216 248 32 316 61 19.3 輸出、一時金収入等 の一括計上の影響を反 肿 18.5 合計 1,370 1,548 178 1,987 367 108 2,354 ※ 主な一時金収入等 【為替レート】 2024年度 5/14予想: 1\$ =145.00円 2024年度 2024年度 ファイザー社との提携に関する繰延収益 ファイザー社との提携に関する繰延収益 \$117M \$169M 修正予想:1\$=152.00円 修正予想 Sumitomo Pharma © Sumitomo Pharma Co., Ltd. All Rights Reserved. 12

そうした中で、主要製品の売上予想を見直しておりますので、ここにお示ししてございます。

オルゴビクスは好調に推移しておりまして、その方向は継続するだろうということで 206 億円増の 785 億円。マイフェンブリーにつきましては、多少苦戦してございますが 122 億円。ジェムテサについても、当初予想を上方修正いたしまして 628 億円と考えてございます。アプティオムも、今期好調に推移しておりますので 366 億円ということで、合計で 1,987 億円の予想を置いておりましたが、367 億円の見直しにより、2,354 億円と予想してございます。



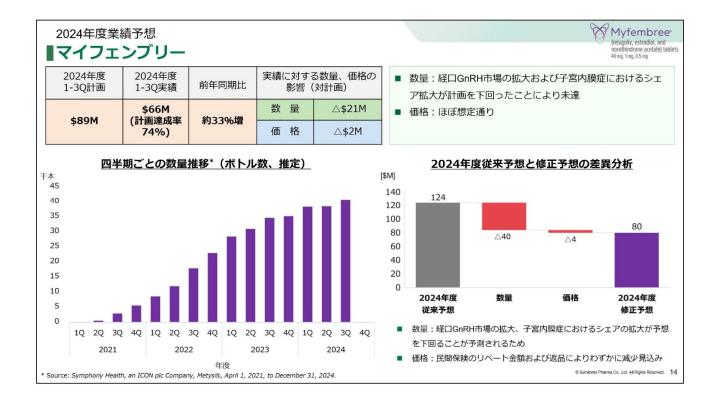
個々の製品についてご説明させていただきます。

オルゴビクスでございます。

われわれの計画では 293 ミリオンドルが第 3 四半期までの合計と予測しておりましたが、現状、 129%アップの 379 ミリオンということで、前年比で 76%増になってございます。

多くの貢献は数量の貢献でございまして、患者負担の軽減に加えて、プロモーション戦略が効果を 出しておりまして、全てのセグメントで想定以上に数量が増しておるということでございます。

今後の予想を右下に示してございますが、修正予想との相違というところで、数量アップの影響効果が非常に大きいということでございます。



マイフェンブリーでございます。

マイフェンブリーは計画達成率が74%で、現状66ミリオンという売上になってございます。一方で前年同期比では、これでも33%でアップということでございます。

その中身は、数量がわれわれの思っていたほど伸びなかったことでございまして、経口 GnRH 市場の拡大および子宮内膜症におけるシェアの拡大が予想を下回ったことが、こういうことになってございます。

下に示してございますが、24年度の従来予想と修正予想の差異では、数量の影響が大きく影響してくるだろうというところで、124ミリオンの売上予想から、80ミリオンに修正させていただきます。

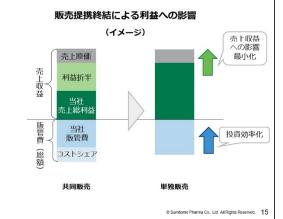
2024年度業績予想

■マイフェンブリーの自社単独による事業化への移行について

- Pfizer社とマイフェンブリーの共同開発・共同販売に関する終結契約を締結(2024年12月末)
- 米国において2025年1月以降、SMPA単独でマイフェンブリーの販売・マーケティング活動を開始

今後の目指すべき姿・収益への影響

- 自社単独販売による製品損益改善を追求
 - ① ジェムテサのプライマリケアチーム活用により売上高への影響を最小化
 - ② 利益折半がなくなることにより粗利が改善
 - ③ マーケティングコストは効率的な投資により影響を最小化
- 柔軟かつ機動的な戦略調整
- 今後の開発は当初の計画に沿って自社単独で推進



オルゴビクスはこれまで通り、Pfizer社との提携を継続する

Sumitomo Pharma

その次、先ほど少し述べましたマイフェンブリーの自社単独の事業化について、意図あるいはその 効果といったようなご説明をさせていただきます。

12 月末をもって、ファイザー社との共同開発販売に関する契約を終結してございます。1 月から は当社 SMPA、住友ファーマアメリカ単独で、販売マーケティングを行っておるということでござ いますが、今後、これによりまして、われわれの収益への影響という意味では、自社単独販売によって製品の損益改善ができると、前向きに捉えてございます。また、今後の営業戦略が柔軟に、あるいは機動的に展開できることで、非常にポジティブだと考えております。

簡単に右下の絵でご説明いたします。現在、12月までは、売上収益の中から原価を引いて、粗利に当たる部分をファイザーさんと折半しておったところが、今回の見直しでそこの部分は全額当社に入ってくる。一方、販管費につきましては、ファイザーさんとそれぞれが負担しておりましたが、当社の販管費の全額ではなく、当社から見たら一部の部分がコストシェアになっておったということになります。

今回の見直しによって、そのコストシェアの部分がわれわれの負担としては増えてまいりますが、 自社の販売体制の効率化によって、その部分も削減していきたいと考えておりまして、このグラフ を見ていただいたらわかるように、われわれとしてはポジティブということでございます。 一方で、非常に好調に推移しておりますオルゴビクスにつきましては、ファイザーさんとの提携を 継続して、一層の拡大を図ってまいりたいと考えております。



ジェムテサでございます。

こちらは計画達成率が 119%で、ほぼ 20%アップで推移してございます。前年同期比では 63%アップになります。

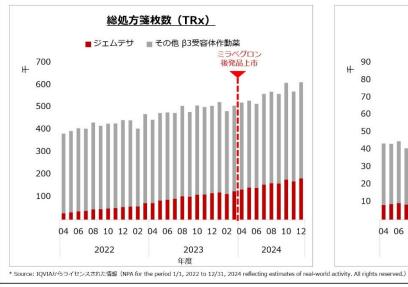
その中を分析しますと、多くは価格による影響がプラス要因でございまして、われわれの見込み以上に価格が高めに推移しておるということでございます。期首の予想に比べまして、返品あるいは Coverage Gap というような負担が少ないことで、平均単価が上がってきておるということでございます。

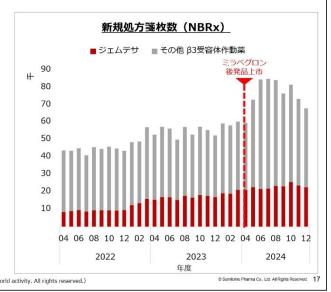
380 ミリオンの予想をしておりましたが、価格のメリットが出ておりますので、413 ミリオンの売上と予想を修正いたしました。

2024年度業績予想 **ジェムテサの処方箋推移**2024年4月のミラベグロン後発品



■ 2024年4月のミラベグロン後発品の上市以降もジェムテサの総処方箋枚数・新規処方箋枚数は増加が続いている





ここにお示ししましたのは、そのジェムテサにつきましては、競合品でありますミラベグロンに 4 月から後発品が出ておることは、皆さんご存知と思います。それ以降の総処方箋枚数あるいは新規の処方箋枚数にどういう影響が出ておるかをお示ししてございます。

この赤の部分がジェムテサでございまして、ミラベグロンの後発品発売以降、大きな変化は出ていないことをご覧いただけるかと思います。

2024年度業績予想

■セグメント別 業績予想(コアベース)

金額単位:億円

		日本	北米	アジア	合計
2	売上収益	998	2,354	458	3,810
修 0	売上原価	518	854	103	1,475
正 2	売上総利益	480	1,500	355	2,335
and the same	販売質及び一般管理質	384	1,162	124	1,670
予 4 想 年	コアセグメント利益	96	338	231	665
- C	切九州无具				485
度	コア営業利益				300
5	売上収益	1,003	1,987	390	3,380
月 2	売上原価	527	763	90	1,380
1 2	売上総利益	476	1,224	300	2,000
4 4	販売費及び一般管理費	466	1,099	125	1,690
日年	コアセグメント利益	10	125	175	310
予度	研究開発費				500
想	コア営業利益				10
	売上収益	∆5	367	68	430
増	販売費及び一般管理費	∆82	63	∆1	∆20
減	コアセグメント利益	86	213	56	355
額	研究開発費				∆15
	コア営業利益				290

日本セグメント

■ 販売費及び一般管理費の削減を見込み増益

北米セグメント

■ 為替の影響により販売費及び一般管理費が増加するものの、売上収益の上方修正の影響が大きく、増益

アジアセグメント

■ 売上収益の上方修正により増益

© Sumitomo Pharma Co., Ltd. All Rights Reserved. 18

24年度の業績予想のコアベースをここにお示ししてございます。

修正前と後の比較という意味では、一番下を見ていただけるとわかりますが、コアセグメント利益 レベルで、日本で 86 億円、北米で 213 億円、アジアで 56 億円の改善ということで、合計 355 億 円の改善になってございまして、それぞれの地域では一番上をご覧いただければと思います。 2024年度業績予想

■ヤンセンファーマとの持効性抗精神病剤「ゼプリオン®」「ゼプリオンTRI®」の国内コプロ締結

- ✓ 注射剤という選択肢を獲得し、情報提供の幅を広げることで、精神科領域での当社のプレゼンス向 上・医療関係者から信頼される医療パートナーとなることを目指す
- ✓ ラツーダ、ロナセンテープとのシナジーも期待(非定型LAI市場は、年間約360億円規模*)



*出典:外部データを基に自社で算出

もう一つ最近発表させていただきましたのは、国内でヤンセンファーマさんと持効性の抗精神病薬 ゼプリオンとゼプリオンTRIの国内でのコプロの契約を締結させていただきました。

統合失調症に対する注射剤という選択肢をわれわれとして確保して、情報提供の幅を広げ、精神科 領域での当社のプレゼンスの向上を図れることを考えておりますし、錠剤であるラツーダ、あるい はテープ剤であるロナセンテープという、統合失調症のわれわれのパイプラインに加えて LAI が加 わることで、非常にシナジーが出せると期待しておるところでございます。

主な	開発品目一覧(2	025年1月31日現在)	2024年10	月以降の変更部分	けは赤字で示してい
領域	一般名/コード名	作用機序等	予定適応症	地域	開発段階
	DSP-0038	セロトニン 5-HT _{2A} 受容体アンタゴニスト、 5-HT _{1A} 受容体アゴニスト	アルツハイマー病に伴う精神病症状	米国	フェーズ1
	DSP-0187	選択的オレキシン 2 受容体アゴニスト	ナルコレプシー	日本	フェーズ1
	DSP-3456	代謝型グルタミン酸受容体 2/3 ネガティブアロス テリックモジュレーター	治療抵抗性うつ	米国	フェーズ1
情神神経	DSP-0378	γ-アミノ酪酸(GABA)A 受容体ポジティブアロ ステリックモジュレーター	ドラベ症候群、 レノックス・ガストー症候群	日本	フェーズ1
791111402	DSP-2342	セロトニン 5-HT _{2A} 、5-HT ₇ 受容体アンタゴニスト	未定	米国	フェーズ1
	CT1-DAP001/DSP-1083	他家iPS細胞由来ドパミン神経前駆細胞	パーキンソン病/医師主導治験	日本	申請準備中
	CT1-DAP001/DSP-1083	他家iPS細胞由来ドパミン神経前駆細胞	パーキンソン病/医師主導治験・企業治験	米国	フェーズ1/2
	HLCR011	他家iPS細胞由来網膜色素上皮細胞	網膜色素上皮裂孔	日本	フェーズ1/2
	DSP-3077	他家iPS細胞由来網膜シート	網膜色素変性	米国	フェーズ1/2
	nuvisertib/TP-3654	PIM1キナーゼ阻害	骨髄線維症	米国・日本	フェーズ1/2
がん	enzomenib/DSP-5336	メニン-MLL結合阻害	急性骨髓性白血病	米国・日本	フェーズ1/2
13.70	DSP-0390	EBP阻害	膠芽腫	米国・日本	フェーズ1
	SMP-3124	CHK1阻害	固形がん	米国・日本	フェーズ1/2
その他	KSP-1007	β-ラクタマーゼ阻害	複雑性尿路・腹腔内感染症、院内肺炎	米国・日本	フェーズ1
COJE	fH1/DSP-0546LP	アジュバント添加スプリットワクチン	インフルエンザ予防	欧州	フェーズ1

次に研究開発についてご説明いたします。

新しい進捗というところでは、この赤字で示してございますが、DSP-3077。他家 iPS 細胞由来の網膜シートでありますが、網膜色素変性を対象疾患として、米国でフェーズ 1/2 を開始いたしました。

研究開発

■臨床開発の主なトピックス

- 精神神経領域(再生・細胞医薬)
 - 他家iPS細胞由来ドパミン神経前駆細胞(日本)
 - パーキンソン病

京都大学による医師主導治験のデータを基に、2025年度承認申請に向けて準備中 医師主導治験の結果は、京都大学より発表される予定

- 他家iPS細胞由来網膜シート(米国)
 - 網膜色素変性 フェーズ1/2試験を開始(2024年11月) (詳細は23ページ)
- がん領域
 - enzomenib(DSP-5336)(米国・日本)
 - 米国血液学会2024 (2024年12月) で最新の臨床データを発表 (詳細は24ページ)
 - 急性白血病 フェーズ1/2試験におけるフェーズ2パートの推奨用量を300mg(1日2回)に決定(2025年1月)
 - nuvisertib (TP-3654) (米国・日本)
 - ・ 米国血液学会2024で最新の臨床データを発表 (詳細は25ページ)
 - 厚生労働省から希少疾病用医薬品指定を受領
- その他領域
 - ジェムテサ/ビベグロン(米国)
 - ・ 薬物治療中の前立腺肥大症を伴う過活動膀胱 効能追加承認 (2024年12月)

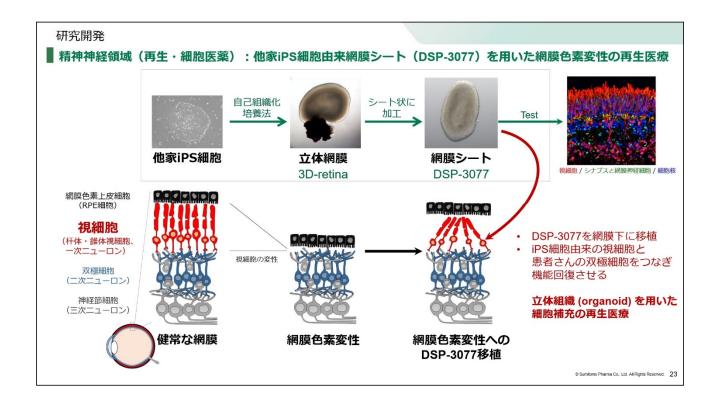
◆ Sumitomo Pharma Co. Lid. All Rights Reserved. 22

トピックスを示してございます。

再生・細胞医薬を含む精神疾患領域では、パーキンソン病の再生医療ということで、国内申請戦略を見直すというのを第2四半期の決算発表時にご説明させていただきましたが、新たなスケジューリングをしておりまして、2025年度の承認申請に向けて活動を再開したということでございます。また医師主導治験の結果は、まもなく京都大学から発表されると聞いてございます。

一方で、11 月に、先ほどお示ししたように新しい治験を米国で開始してございます。がんでは、enzomenib、nuvisertib とも良いデータが継続して出ておりまして、12 月の米国血液学会では enzomenib の発表をして、非常に高くご評価いただいていますし、nuvisertib にも皆さんの注目が 集まってきているところでございます。

もう一つトピックスといたしましては、ジェムテサの、米国で薬物治療中の前立腺肥大症を伴う過活動膀胱について、効能の追加承認を 12 月に受けました。



ここに新しい治験を始めた3077について、絵で示してございます。

眼の疾患で、網膜色素変性という疾患がございます。その疾患は、この赤で示しております、光を 感じる視細胞が変性・脱落していくことによって眼が見えなくなる疾患でございます。

この図では、下から光が入ってきて、上の赤いところで光を感じるというような網膜の模式図でございますが、そういう患者さんに対して、iPS 細胞から作った網膜シートを移植することによって、再び光を感じるようになるだろうということで、今、フェーズ 1/2 の治験を、ハーバード大学の眼科アフィリエイトの病院であります Mass Eye and Ear で開始いたしました。

研究開発 米国血液学会2024 発表データより

■がん領域: enzomenib (DSP-5336) 急性白血病のフェーズ1/2試験

- ✓ 重要な有効性の評価指標であるCR/CRh率は、MLLr患者群で30.4% (うち300mg BID群では40.0%)、NPM1m患者群で47.1%に認められた
- ✓ QTc延長や分化症候群などの安全性においても、良好な忍容性が示された

有効性

- ✓ 完全寛解または部分的血液学的回復を伴う完全寛解 (CR/CRh): MLLr患者群で30.4%(うち300mg BID群では40.0%)、NPM1m患者群で47.1%
- 客観的奏効(ORR):MLLr患者群で65.2%、NPM1m患者群で58.8%
- ✓ アゾール系抗真菌薬の併用有無による有効性への影響はなし

安全性

- ✓ QTc延長はGrade 3が1% (1/84名)
- ✓ 分化症候群は10.7%(9/84名)に認められたが、死亡や投与 中止に至るものは報告されていない
- ✓ 用量制限毒性 (DLT) は認められていない
- ✓ 関連のある主な有害事象は消化器系毒性であるが、Grade 3以 上は1% (1/84名)

2024年10月22日		MLLr		NPM1m			
データカットオフ	200 mg BID n = 8	300 mg BID n = 15	Total n = 23	200 mg BID n = 10	300 mg BID n = 7	Total n = 17	
Objective Response Rate (CR + CRh + CRi + MLFS)	50% (4/8)	73.3% (11/15)	65.2% (15/23)	60% (6/10)	57.1% (4/7)	58.8% (10/17)	
Composite CR (CR + CRh + CRi)	37.5% (3/8)	53.3% (8/15)	47.8% (11/23)	50% (5/10)	42.9% (3/7)	47.1% (8/17)	
CR + CRh	12.5% (1/8)	40.0% (6/15)	30.4% (7/23)	50% (5/10)	42.9% (3/7)	47.1% (8/17)	

CR: 完全寛解、CRh: 部分的血液学的回復を伴う寛解、CRi: 不完全な血球回復を伴う寛解、MLFS: 形態学的に白血病細胞がない状態、BID: 1日2回

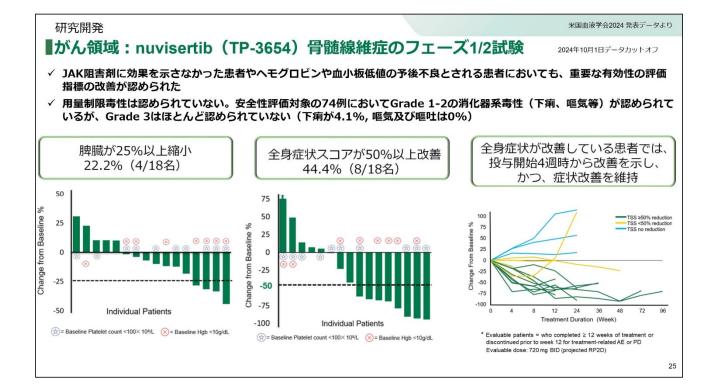
次は、enzomenib (5336) のフェーズ 1/2 試験のトピックスについてまとめてございます。

有効性・安全性について、引き続いて良いデータが出てきておるということです。

有効性では、完全寛解または部分的血液学的回復を示すような完全寛解というところで、MLL リアレンジメントの患者様あるいは NPM1 ミューテーションの患者様で、30%あるいは 47%という非常に多くの患者さんに効果が見えてきている。

一方で、強みでありますのは安全性のところでございまして、QT 延長については若干の患者さんで出ておりますが、非常に少ない QT 延長の発現率になってございます。

もう一つ、この種類の薬で課題になります分化症候群も、約1割の患者さんで認められておりますが、死亡や投与中止に至るような重篤なものがないところで、安全で有効性が高い薬ということで、ベスト・イン・クラスになるのではないかというような評価をいただいておるところでございます。



続きまして nuvisertib でございます。

脾臓が 25%以上縮小した患者さんが 22%おられますし、全身症状スコアが 50%以上改善した患者が 44%で、非常に良い結果が続いてございます。

右にありますように、全身症状が改善している患者さんでは、4週ぐらいから改善を示し、しかも症状改善が継続しているデータが出つつございます。

私からの説明は以上でございます。引き続いて質疑いただければと思います。よろしくお願いします。

石田:木村さん、ありがとうございました。

質疑応答

司会 [M]: これより質疑応答に移りたいと存じます。

JP モルガン証券、若尾様、ご質問をお願いいたします。

若尾[Q]: JP モルガンの若尾です。

私からは、この主要3製品の動向について教えてください。非常に好調に推移していると思っていて、今後どうなっていくかに注目したいと思っているので、知りたいです。特にオルゴビクスとジェムテサ、フォースクォーターの御社の前提と足元の状況について知りたいです。

フォースクォーターからメディケアパート D、日本も始まって、グロスネットの改善があり、アポリーブの効果を織り込んでいらっしゃると思うのですけれども、それはどうなっているのか。あと、足元の処方箋動向だけ見ますと、年末年始の影響なのか、1月に入ってから2剤とも弱いようにも見えますので、そのあたり、どう評価されているのか知りたいです。

中川 [A]:中川より、ただいまのご質問に対してお答えさせていただきます。

まずオルゴビクス、われわれとしては、非常に強いデマンドの増が今後も継続すると見ております。おっしゃったように、今年の1月からさらに保険制度が変更になっており、これもまたわれわれにとってはポジティブに働くと見ておりますので、フォースクォーターにおいても好調な結果を期待しているということであります。

一方、ジェムテサ、こちらは 12 月までのデマンドの伸び方と今年の 1 月以降は少し変わってくるだろうとは見ています。これはメディケアパート D との交渉のいろいろなペイヤーさんとの交渉の結果ですけれども、ただ一方で、そのデマンドの増え方がおそらく少し鈍化すると見ておるのですが、価格面に関しては逆にこれがポジティブに効いてくるとわれわれは見ており、セールスとしてはこれまで通りのトレンドを十分達成できるものと、フォースクォーターも見ています。

若尾 [Q]: そのフォローアップで。そうすると、オルゴビクスのほうが状況としてはあまり変化なく伸びていきますということだと思うのですが、一方で、御社のご計画からすると、フォースクォーターって 132 ミリオンドルです。そうすると、サードクォーター147 なので、QonQ で減るように見える。今のご説明だと、どちらかというともう少し伸びてもいいのではないかなと思ったので、その辺を確認したい。

あと、このジェムテサのメディケアパートDのカバレッジ変更ですが、これは単純に、カバレッジ は減るけど、グロスネットは改善するので、ネットではポジティブという理解でいいですか。

中川 [A]: たぶん引き算されると、おっしゃったように若干フォースクォーターのほうが、オルゴビクスについては3クォーターより下がっているように見えるというお話だと思うのですけれども、これは、これまでも月々あるいはクォーターごとに一定ばらつきはございます。特に12月は休暇前ということで、一定、需要が特に伸びるようなところもあり、そういう要素もあって、3クォーターは非常に良かったというのがあります。

あと、1月、2月、3月につきましては、保険のリセットみたいなことが起こっており、そういう部分もありますので、必ずしも綺麗に右肩上がりに毎月上がっていくというよりは、若干そういう上下はしつつ、ただ大きなトレンドとしては右肩上がりと理解していただくのが正しいのではないかと思っています。

石田[M]:ジェムテサの質問につきまして、もう一度お願いしてよろしいでしょうか。

若尾 [Q]: この意味を解釈したい。よくわからなかったので教えていただきたいのですけど。カバレッジが変更になることから数量は低下するというのは、ジェムテサをカバレッジしているペイヤーの数が減るから減るということですか。一方でグロスネットは改善するから、ネットでは売上が伸びますという、そういうことを意図されているのですか。カバレッジが変更になって数量が低下するというのは、どういう意味ですか。

中川 [A]:基本的にはそのご理解で正しいです。

若尾 [Q]:では、今、足元の処方箋動向を見るとややジェムテサが弱いのは、そういうところも影響しているのですか。

中川[A]:そのご理解で正しいです。

若尾 [Q]:特にミラベグロンのジェネリックにやられているとか、そういうことではない。

中川 [A]:はい。われわれとしてはそういうふうには思っておらず、これはわれわれの想定通りの動きと今見ています。

若尾 [Q]: ちなみに、それぞれクロスネットって1月からどのぐらい改善しているのですか。

中川 [A]: それは非開示とさせていただきます。

若尾 [Q]:二つ目、enzomenib ですが、木村様がおっしゃっていただいた通り、やっぱりネスト・イン・クラスだと思うのです。それで、この薬に関して、まだ DLT が認められていないというこ

とで、ドーズのアップの可能性もあるのかなと思ったのですが、結局 300mg でフェーズ 2 パート に進むということだと思うのですが、なぜドーズアップしなかったのか。1 パートなのかわからな いですけど、次のアップデートのタイミングが知りたい。

あとは、御社単独でどこまでできるか。ファーストラインまでしっかりできそうなのか知りたい。

佐藤 [A]:佐藤でございます。

まず推奨容量につきましては、アップデートのところに 300 ミリで決定とご報告申し上げております。300mg のデータは本日の資料にも載っていますし、学会でも発表させていただいておりますが、1 容量上についても検討してみた結果、有効性としても 300mg で十分だろうという判断で、300mg に決めたというところでございます。今年度中に、フェーズ 2 パートの投与は開始する予定でございます。

最後に、ファーストラインまでできるかにつきましては、現時点で決まっていることはまだござい ません。

若尾 [Q]:御社の今のケイパビリティとして、実行できますか。R&D 費とか、開発部隊の今の状況からして、セカンドライン以降よりも、ファーストラインのほうが大変だと思うのですけど。ケイパビリティからしてできない。

木村 [A]:ケイパビリティとしては十分できるとは思っておるのですが、nuvisertib のことも含めてデータの見方を見ながら、どのようにした開発戦略をとっていくか考えていきたいと考えております。

若尾[Q]: ライセンスアウトも視野に入れられているということだと思うのですが、かなりデータとしては良いと思うのですけれども、ライセンスアウトするとすれば、どういったタイミングになりそうですか。

木村 [A]: ライセンスアウトというか、両剤が非常に好調に行くことで、さらに加速する、拡大することになると、そのリソースも考えて、パートナーさんということも一つの可能性かとは思いますが、もう少しそれを進めていくにはデータが必要じゃないかとは思っております。当面、それぞれ当社で進めていく方針ではおります。

若尾 [Q]:最後に、今、アップデートはいつですかという質問をさせていただいたのですけれども、次のアップデートっていつ頃になりますか。今年はなさそうですか。enzomenib についてです。

木村 [A]:まずフェーズ 2 に入った段階で何らかのアップデートができるかと思います。そんな遠からずできるかと思いますし、データについては、学会その他を見ながら考えていきたいと思います。

若尾 [Q]: 学会に出るデータというのは、フェーズ1パートのデータのアップデートという理解でいいですか。

木村 [A]:フェーズ 1 パートのまとめのデータというのが、一つのタイミングかなと思います。

石田 [M]: モルガン・スタンレーMUFG 証券の村岡様、お願いいたします。

村岡 [Q]:モルガン・スタンレー、村岡です。

来期以降の考え方を整理させていただきたい。今回この通期のガイダンス、資産売却を除いても黒字化になっているわけなので、来期も資産売却抜きで黒字拡大と考えていいのか。そして、その先までもコメントいただければ嬉しいのですが、26年度は拡大できるのか。たぶんこのあたりから、今日話にもあったファイザーの繰延益も減り出してきたりとかもあるので、どういうふうに見ておけばいいのか、今の御社のスナップショットの状況を踏まえた上でコメントしていただけると助かります。

その中で、復配とかも、早すぎるかもしれないですけど、考えるのか教えてください。

木村 [A]: まず最後の復配につきましては、確かに好調な業績ではございますが、ご存知のように 財務状況、非常に厳しいということもございますので、タイミングについては慎重に考えてまいり たいと考えております。

それともう一つ、今期のこの成績の中には、マイフェンブリーの繰延収益の一括計上が、24 年度の年度の業績修正予想の中には、78 億円計上してございます。だから、その分は引いて考えないと、実力を過大に評価してもらうことにはなります。

3製品とも非常に順調に伸びておるということでございますが、一方で、実はアプティオムが、もう今、営業を、レップをリストラしておりまして、成り行きで売っておる。今年の6月にはLOEが来るということがございます。日本では、エクアに続いてエクメットも独占期間が終了するネガティブな要因もございます。

事業としては、収益力は増してはいきますが、全体としては、見た目それほどの勢いも見えないような可能性も考えてございます。が、順調に再建に向けた道は歩み始めたと認識しているところでございます。

村岡 [Q]: あまり明確なことをおっしゃりにくいのは百も承知ですが、改めて来年度、そしてもう1年先の26年度を見据えて、このコア営業利益は、今期のこの300、仮に78億円分を引いたとしても、右上に上がっていくのか、まだでこぼこが十分にあると思った方がいいのか。

木村 [A]:まずアプティオムの LOE は、失礼しました、5 月でございました。

コア営業利益、来年度、もともとお約束しておった最終損益の黒字は、引き続いて達成できるとは 考えてございます。一方で、マイフェンブリーの繰延収益については、今まで少しずつ計上しておったものがなくなるということもありますので、若干、右肩上がりではなく、多少のでこぼこを含みながら伸びていくイメージで捉えていただければと思います。定量的なところは、また改めて今年の決算が見えてきたあたりでご説明できればなと思っております。

村岡 [Q]: あと、先ほど、ジェムテサの件でいろいろやり取りが。この資料の17ページ目の新規処方箋の部分が、TRx は伸びているのだけれど、新規処方箋が足元、スローになっている。これは、先ほどの話からこれはそうですが、カバレッジの変更で単価が戻る、良くなってくるから全然、このトレンドが続いても単価で補ってプラスですという、そういう理解でよかったのでしたっけ。すみません、雑な理解ですけれども。

木村 [A]:まさに11、12を見ておっしゃっていると思うのですけど、前年度、前々年度を見ていただいてわかりますように、10、11、12というのは、いつも季節的な要因もありまして不調なのです。だから、そのあたりで、われわれとしてはそんな心配しておらないということであります。

ただ、申し上げたように、数量的には1月から減ってくるとは思っておりますが、むしろ製品、グロスとネットの改善もあって、売上の上昇傾向は今後もわれわれとしては強気にというか、読んでおるところでございます。

石田[M]:ジェフリーズ証券、スティーブン・バーガー様、よろしくお願いいたします。

バーガー[Q]:ジェフリーズ証券、スティーブン・バーガーです。

6ページ、ファイザー関連の収益、去年 12 月末、88 ミリオンドルで、今期 147。その差額、それはマイフェンブリー関連の繰延収益ですか。

木村 [A]: そうです。その差額の 59 ミリオンが、マイフェンブリーの繰延収益とご認識いただければと思います。

バーガー [Q]:マイフェンブリー関連、毎年どれぐらい収益があって、どれぐらい減っていく。そこら辺を教えてください。

木村 [A]: 繰延収益については、年間 30 ミリオン出ております。それが来年度以降はなくなってくるということでございます。

石田 [M]:大和証券、橋口様、ご質問をお願いいたします。

橋口[0]:橋口です。

中長期の事業計画を検討されている中で、どういったところが主にディスカッションポイントになっていて、今後それをどのようにわれわれに出していただけそうか。ブリッジローンの返済に関しても、引き続き協議中ということですけれども、そこでどういうことが論点になっているのか、調整が必要なのかということ。

それから、確か去年の春ぐらいの時点で、中長期の経営戦略、中計のようなものだと私は理解したのですけど、そのときの御社の表現を忘れてしまったのですが、今年度のどこかでご発表されたいということもおっしゃっていたかと思います。そういったものが仕上がって、われわれにお示しいただけそうなタイミングはいつ頃になりそうなのか、教えていただければと思います。

木村 [A]:まず中期の計画については私から説明させていただいて、借入金の借り換えは、酒井からこのあとご説明させていただきます。

まず、われわれ、銀行との協議もありまして、今後の計画はもうすでに持っておりますが、そのあとどういうふうに会社を目指していくんだというところ、あるいは、ご存知のように 12 月から非常に人員が減った体制に、特に日本がなってございますので、そうした中での人事施策についての考え方をまとめたようなものを、今、作ろうということで検討を進めておるところです。

ですから、中期経営計画みたいな大部ではございませんが、われわれの考えを示して、まず社内に はお示ししたい。社外に対してどういうふうにお示しするか、今まさに議論しているところでござ いますが、タイミングとしては今年の春ぐらいになるかなと考えております。

酒井さん、借入について現状の説明をお願いします。

酒井基行 [A]: 酒井です。

現在、私どもの取引銀行さんを中心として、交渉していただいています住友化学も含めて、交渉協議をしている最中でございますので、今の段階で具体的に何がどうということはなかなか申し上げにくいのです。

前にもそんなことを申し上げたかと思いますが、金融機関さんも個別のご事情を持っていらっしゃいますので、どういう金融機関さんがどういう条件で参加されるかについては当然、参加行もそれなりの数がありますので、まず条件面の調整をしているとご理解いただければと思います。

橋口 [Q]: さっき木村さんが春ぐらいとおっしゃったのは、これ、御社内で示されるのが春ですか。それともその内容を社外にというのが春とおっしゃいましたか。

木村 [A]: まさにそれを議論しておるところであるのですが、いったんの目標としては、今年度 3 月末というところを想定して作業を進めておるところです。それをどういうふうに社外の方に説明するか、今ちょうど議論しておるところです。申し訳ございません。

石田 [M]:シティグループ証券、山口様、ご質問をお願いいたします。

山口[Q]:シティ、山口です。

オルゴビクス、ジェムテサ、マイフェンブリー、アメリカの今売れている3製品ですけれども、これ、製造はアメリカですか。私の理解では、海外で作ってアメリカに持ってきていると思うのですけど、関税がかかるか、かからないかというところも含めて、製造場所がアメリカかどうか、確認していただけますか。

木村 [A]: サプライチェーンの中で、一部はアメリカでもありますし、多くは海外です。アメリカから見た海外で製造しておるのが現状でございます。輸入医薬に対する関税というようなニュースを見まして、われわれも定量的にそれがどれだけの影響があるのかを精査しているところでございますので、現状、今ぐらいの情報ということでございます。

石田 [M]: UBS 証券、酒井様、ご質問をお願いいたします。

酒井文義 [0]: UBS、酒井です。

木村社長、研究開発ご出身なので、もう十分ご存知というか、この質問になるのですけれども、主な開発品目一覧に掲載されている品目数と、それから領域、あと御社の年間の研究開発予算は今、485 億円ですけれども、これでこのポートフォリオを回していけるのかどうか。

現実問題として、これ、難しいのではないかなと、はたから見ていると思う。というと、今後の開発の取捨選択、いいものでも捨てていかなきゃいけないという判断が出てくると思うのですけれども、そのいわゆるディシジョンメイキングポイントみたいなタイミングはどこに訪れるのか。

それともご自身のご経験から、いや、十分にこの 500 億円程度の R&D で回せる体制にしていけるとお考えなのか、その辺を教えてください。

木村 [A]: まさに頭の痛いところでございまして、これらが今並んでいるのは、非常にフェーズが低いのでこれだけの数が並んでおるということであります。これをフェーズ 2B、あるいはフェーズ 3 といったような検証試験に進めるには、われわれとして全て良いデータが出たとしても、選択と集中をしなければならないというところであります。

そうしたときに、何らかの形でパートナーさんと組む、あるいは導出ということが考えられます。 基本的には、それにしても、臨床での価値が少しでも、俗に言う POX というようなところの一部 でも見えてくることで、相手さんにも価値がわかっていただけると思っておりますので、そこが見 えてきた段階が一つのポイントとは思っております。ほとんどが同じようなステージにおりますの で、タイミング的にもそんなにずれなく評価していけるのではないかなと。

おっしゃってくださったように、500 億では、これを全部自社で開発する余裕はないというのは、正直なところでございます。

酒井文義 [Q]: そうしますと、研究開発レベルは今のレベルを想定してお考えになる、経営されるという理解でよろしいですか。

木村 [A]: はい、そうですね。この 2~3 年はまだこのレベルで行きたいと思っております。そのあと、米国の製品が伸びてきて、われわれがより筋肉質の体制になってくれば、研究開発費にも多少、今まで以上に振り分けられるタイミングも来ると思っておりますが、この 2~3 年はこういう状況が続く。今のレベルの研究開発費が続くと覚悟しております。

石田 [M]:他にご質問ございませんので、質疑応答をこれにて終了させていただきます。

以上で住友ファーマ 2024 年度第 3 四半期決算説明会を終了いたします。本日はご参加いただきまして誠にありがとうございました。

[了]